

台湾における自己推薦型選抜方法の展開

南部広孝 (長崎大学)

わが国と同じように、台湾においても大学入学者選抜方法の多様化が進んでおり、学力試験にもとづく選抜を核としながら、学校推薦そして自己推薦型選抜とみなされる「個人申請」(導入時の名称は「申請入学」という選抜方法が1990年代から導入されている。本稿では、このうち「個人申請」という自己推薦型の選抜方法に焦点をあて、具体的な選抜の方法を検討するとともに、わが国のAO入試との比較を通じてその特徴を明らかにした。

1. はじめに

台湾では現在、多様な大学入学者選抜方法がとられている¹⁾。具体的に言えば、主要な選抜方法として、学力試験によって合格者を決める試験分配入学(原語は「考試分發入学」)、学校推薦、それから自己推薦型選抜とみなすことができる「個人申請」とよばれる選抜方法の3つがある。2003年の合格者についてみれば、これら3つの方法を経て合格した者の比率はそれぞれ80.5%、6.1%、10.2%となっている(教育部2004: 41)。わが国でも現在、一般選抜、推薦入学そしてアドミッション・オフィス入試(以下、AO入試)が主要な3つの選抜方法となっており、各選抜方法を経て入学した者の比率はそれぞれ59.4%、34.9%、4.9%となっている(文部科学省2004)。構成比率には相違がみられるものの、学力試験によって合格者を決める選抜方法、学校推薦にもとづく選抜方法、自己推薦型の選抜方法の3つが主要な選抜方法であり、それぞれ一定の比率を占めているという状況は、台湾とわが国で共通している。

本稿は、とくに台湾の自己推薦型選抜である「個人申請」に焦点をあて、その選抜方法の実態を明らかにするとともに、やはり自己推薦型選抜であるわが国のAO入試との比較を通じてその特徴を明らかにすることを目的としている。

これまでわが国において、台湾の大学入学

者選抜方法が研究対象とされることはほとんどなかったと言ってよい。数少ない先行文献の1つとして岩坪(1996)があるが、それは現地でのインタビューによりながら1990年代後半の改革の概要をまとめたものである。

「個人申請」は1998年に導入されたものである(導入時の名称は「申請入学」)ことから、それは、上述した岩坪の文献はもとより、わが国では紹介というレベルでさえまったくなされていないのが現状である。

2. 台湾の大学入学者選抜方法

台湾では1954年以降約半世紀の間、複数の大学が参加する連合大学入学試験(原語は「聯考」)が主要な入学者選抜方法であった。参加する大学や試験の実施方法はしばしば変化したものの、基本的には試験科目の組み合わせを3つないし4つのパターンとし、各募集単位²⁾が専門分野などにしたがってそのいずれかを選択するという方式がとられていた。1984年には傾斜配点方式が導入され、同じ組み合わせを選んだとしても、比重のかけ方によって各募集単位の特徴を出すことが可能になった。

こうした単一の選抜方法から多様な選抜方法の併用へと変わったのが1990年代である。1992年に大学入学試験センターから出された報告書にもとづき、選抜方法の改革がおこなわれた。このときの主要な変更点は次の2

つである。1つは、それまでの連合大学入学試験に加えて、大学教育を受ける能力を備えているかどうかを確認することに重点をおいた学科能力テスト（原語は「学科能力測驗」）が導入されたことである。もう1つは、学校推薦をふまえて選抜をおこなう推薦入学（原語は「推薦甄選」）制度の導入である。後者の導入にあたってはわが国の経験が参考にされたと言われている（李・鄭 2003: 152）。さらに1998年には、「申請入学」とよばれる選抜方法が取り入れられた。この「申請入学」は学校の推薦が必要ではなく、大学が示す条件に合致する者は自らの意思に応じて自由に出願できることから、自己推薦型の選抜方法だとみなすことができる。この選抜方法が試験的に導入された最初の年である1998年には、20の大学で564名が募集された（行政院新聞局 1998: 847-8）。このとき「申請入学」が導入された理由としては、大学と学生が双方向的に選択できることや、推薦入学では多くの条件が教育部（わが国の文部科学省に相当）によって決められるのに対して「申請入学」の条件は各大学が自ら決められることなどがあった⁴⁾。

このような選抜方法の多様化という流れは21世紀に入ってさらに進んだ。2002年には新たな選抜制度が導入された。最も大きな変化は連合大学入学試験が廃止され、それに代わって学科能力テストと指定科目試験³⁾を組み合わせる方式がとられたことである。また、従来の推薦入学と「申請入学」が選抜入学制（原語は「甄選入学制」）という形で正式の選抜方法として位置づけられた。これらは、学科能力テストと各募集単位が実施する選抜試験を組み合わせることで合格者を決定する方式である。これに加えて、後者の選抜入学制の比率を高めることが意図され、計画段階では入学定員の4割をこれにあてることになっていた⁵⁾。このような制度の導入にあたっては、試験と学生募集の分離と個別募集単位における

主体性の向上、多様な選抜方法の導入、受験教育や成績至上主義の是正が強調された。その一方で、制度を変えても学生の負担は軽減されないとか制度が複雑でわかりにくいという指摘や、公平性が確保できないという批判、比率が高まる推薦入学や「申請入学」で用いられる面接試験や提出書類の審査における基準があいまいで公正性或客観性の面で問題があるという批判が出された⁶⁾。

そうした点も考慮し、2004年からは修正された選抜制度がとられている。選抜入学制は、推薦入学を学校推薦、「申請入学」を「個人申請」にそれぞれ改め、両者を統一的に実施することになった。選抜方法には変わりがないが、「個人申請」では1人で出願できるのは5つの募集単位までに制限され、さらに大学によっては当該大学で1つの募集単位にしか出願を認めないところもあらわれた。

以上のように、台湾の大学入学者選抜方法は近年多様化傾向を強めているが、そのなかで「個人申請」は1990年代後半に試験的に導入され、2002年から正系化された新しい選抜方法なのである。

3. 「個人申請」の選抜方法

現行の大学入学者選抜方法において、「個人申請」は2段階選抜制がとられている。まず1月末ないし2月に実施される学科能力テストの結果にもとづいて一定の篩い分けがおこなわれ、それから各募集単位が4月に実施する選抜試験の成績や学科能力テストの成績を用いて合格者を決定することになっている。また、実技を伴う専門分野では、2月におこなわれる技能試験（原語は「術科考試」）の結果も加味される。音楽や美術、体育の試験は大学技能試験委員会聯合会が統一的に実施し、舞踏や戯劇などその他の実技に関しては各募集単位が試験をおこなうことになっている。

本節では、学校推薦および「個人申請」を採用している各募集単位の選抜方法をまとめ

た『九十三学年度大学甄選入学招生简章彙編』を用いて、2004年における「個人申請」の募集方法を検討する。同年にこの募集方法を採用していたのは募集単位全体のおよそ3分の2にあたる931の募集単位であった。

3.1 第1次選考

学科能力テストでは国語、英語、数学、社会、自然の5科目が課される。このうち社会は歴史、地理、三民主義、現代社会を含み、自然は物理、化学、生物、地球科学を含んでおり、どの科目も高級中学（わが国の高等学校に相当）2年次までに学習する内容が出題範囲とされている。各募集単位は、このテストにおける5つの科目および総合点のうちどれを篩い分けの指標として用いるか、また指標とする科目または総合点についてどの程度のレベルの成績を求めるのか、さらには定員の何倍以内を合格とするのかといったことについてあらかじめ情報を公表している。このテストでは、各科目および総合点の成績が素点ではなく15分位のどこに位置するかで与えられるので、各募集単位が求める成績のレベルは、どのグループ以上に属していなければいけないかという形で示される（表1）。

表1 学科能力テストの要求基準

基準	説明
「頂標」	成績上位 12%目の受験者が属するグループ
「前標」	成績上位 25%目の受験者が属するグループ
「均標」	成績上位 50%目の受験者が属するグループ
「後標」	成績上位 75%目の受験者が属するグループ
「底標」	成績上位 88%目の受験者が属するグループ

たとえばある科目で「後標」という基準が示されていたとすれば、その科目については成績が上位から数えて75%目の受験者が属

するグループ以上にいなければいけないということである。これに倍率の設定が加わった場合、その成績の基準をクリアしたうえで、さらに設定された倍率まで絞り込まれる。

このように、第1次選考となる学科能力テストによる篩い分けでは考慮できる項目が非常に多く、したがって篩い分けの方法は募集単位によって非常に多様である。たとえば、国立台湾大学歴史学系と医学系の基準は表2のようになっている。表中「..」は篩い分けのさいにその項目を対象としないことを示している。他方で、たとえば国立宜蘭大学生物機電学系が総合点についてのみ2倍としているように、いわゆるわが国の足切りのような単純な選抜のしかたをしているところもある。

表2 国立台湾大学歴史学系および医学系の選考基準

科目	歴史学系		医学系	
	検定	倍率	検定	倍率
国語	頂標	3	頂標	2
英語	頂標	3	頂標	2
数学	後標	..	頂標	2
社会	均標	5	前標	8
自然	頂標	2
総合点		3

第2次選考に進める人数を募集定員の何倍に設定しているのかをみると、1.5倍から15.0倍の範囲で24種類ある。このうち選択した募集単位が最も多いのは3.0倍という倍率で、全体の61.4%にあたる572の募集単位がこの倍率を設定している。これに続くのは5.0倍（募集単位全体に占める比率9.7%。以下同じ）、4.0倍（7.3%）、2.0倍（6.9%）であり、最も高い倍率である15.0倍（3.5%）もそれに続いている。

3.2 第2次選考

第2段階の選考は主として、学科能力テス

トの成績と各募集単位で実施される選抜試験の結果を組み合わせでおこなわれる。後者の選抜試験には口頭試験・面接試験、小論文・作文、学科試験、常識や論理的思考力を問う各種の筆記試験（以下、その他の筆記試験）、音楽や美術、体育の技能試験、提出資料の審査などがある。細かくみると内容は非常に多様で、学科能力テストの成績で対象とされる科目は募集単位によって異なっているし、学科試験として課される科目や内容も専門分野によってさまざまである。それから、その他の筆記試験としてまとめたなかには、思考・潜在力試験や推理思考筆記試験、推理測定、学習潜在力検査、経済常識と推理、商業管理常識・論理測定など多様な試験・検査が含まれている。

以上の選抜方法を用いている募集単位が募集単位総数に占める比率をそれぞれ求めると、その比率が最も高いのは学科能力テストの成績（96.7%）⁷⁾であり、口頭試験・面接試験（79.9%）、提出資料の審査（79.4%）、学科試験（18.3%）、技能試験（9.8%）、その他の筆記試験（5.4%）と続き、小論文・作文（3.8%）が最も低くなっている。この結果はおおまかに言えば、学科能力テストの成績と口頭試験・面接試験または提出資料の審査を中心にしながら、必要に応じて他の検査方法が採用されているとまとめることができる。

また、複数の検査方法を組み合わせて合格者を決定するときの配点比率も募集単位によって大きく異なっている。最も多い組み合わせパターンは学科能力テストの成績と口頭試験・面接試験、提出資料の審査を組み合わせた方法であるが、この3つにそれぞれ配点が与えられている456の募集単位について配点比率をみると、学科能力テストの成績が10%から85%、口頭試験・面接試験が10%から60%、提出資料の審査が5%から70%の間で割り当てられている。これら3つそれぞれにどの程度の比率が与えられているのかを整理

したのが表3である。学科能力テストの成績、口頭試験・面接試験、提出資料の審査のそれぞれについて33%を超える比率が割り当てられていれば「+」、そうでなければ「-」を与えてパターン作成し、整理している。

表3 配点比率のパターン

パターン		募集単位数
I型	+ + -	94 (20.6%)
II型	+ - +	7 (1.6%)
III型	+ - -	275 (60.3%)
IV型	- + +	10 (2.2%)
V型	- + -	58 (12.7%)
VI型	- - +	12 (2.6%)

注：パターンは、学科能力テストの成績、口頭試験・面接試験、提出資料の審査の順で33%を超える比率が割り当てられていれば「+」、そうでなければ「-」を与えている。

最も多く採用されているのは、学科能力テストの成績をかなり重視するIII型（「+-」）で、約6割の募集単位がここに含まれる。なかでも「50%、30%、20%」というパターンを採用している募集単位が89あり、また「40%、30%、30%」も57の募集単位が採用している。これに続くのはI型で、このうち約半分の募集単位は「40%、40%、20%」という比率である。全体的にみると、学科能力テストの成績に重点をおいているところが多いことがわかる。しかしその一方で、表3には考えられる6つすべてのパターンが含まれていて、配点比率の設定のしかたは非常に多様であることも事実であり、具体的な数値まで考えるとそのことはいっそう顕著である。

具体的な選抜方法の例として国立台湾大学歴史学系と医学系を再び取り上げると、まず歴史学系では、入学定員の3倍にあたる45人を対象とし、口頭試験のみを課し、学科能力テストの成績（国語、英語、数学、社会を同じ比率で合計する）と口頭試験の結果を同じ比率であわせた総合点によって合格者を決

定する。一方医学系では、入学定員の2倍にあたる30人に対して、口頭試験、化学および生物の筆記試験、それから適性検査（原語は「性向測驗」）が課される。これらと、学科能力テストの成績（国語、英語、数学、自然の各科目の成績にそれぞれ1.00, 1.15, 1.25, 1.50の比重を乗じて計算された得点）をあわせて総合点を算出するが、そのさい、学科能力テストの成績が総合点の20%、口頭試験が40%、化学および生物の筆記試験がそれぞれ20%となっており、適性検査は入学後の参考のみに用いるとされている。

4. わが国のAO入試との比較からみた「個人申請」の特徴

最後に、わが国のAO入試と大きく異なる点をあげながら、台湾における自己推薦型選抜である「個人申請」（2001年までは「申請入学」）の特徴をまとめることにする。

まず第1に、導入の過程が異なっている。わが国のAO入試が主として募集単位ごとに徐々に導入されてきているのに対して、台湾の「個人申請」は、導入こそ試験的だったものの、2002年からは正式な選抜方法の1つと位置づけられ、入学定員の約10%が割り当てられた。2004年には全体のおよそ3分の2にあたる募集単位がこの選抜方法を採用している。なお、学部数を指標にしてわが国におけるAO入試の導入状況を確認すると（平成16年度）、AO入試を導入しているのは802学部（うち国立大学は75学部）で学部総数の41.5%（国立大学のみでは19.4%）となっている。入学者数で見ると、全体では入学者総数の4.9%（国立大学のみでは1.2%）がAO入試を経ている（文部科学省2004）。

第2に、2段階制をとる選考のうち第1次選考が全国统一で実施される学力試験であることがあげられる。この点は、わが国のAO入試が原則として学科試験を課さないことになっているのとくに対照的である。しかも

第2次選考においても、ほとんどの募集単位でこの学科能力テストの成績が評価項目として取り入れられているし、さらに独自の学科試験を課すところも少なくない。

第3に、第2次選考に関しては、学科能力テストの成績を用いることを除いてはわが国のAO入試と大きな相違はなく、多様な方法がとられている。とは言うものの、そこで用いられる方法のなかには、思考力や推理力の試験・検査といったわが国ではあまりなじみのないものが含まれている。また相対的に言えば、小論文や作文を採用する比率が低い。第2にあげた点とあわせて考えると、自己推薦型であることは同じであっても、選抜のさいに使おうとするツールが非常に異なっていると言える。

最後になるが第4に、選抜方法が配点比率なども含めて事前に公表されていることもわが国とは異なっている。前節の分析に用いた『九十三学年度大学甄選入学招生簡章彙編』は学校推薦と「個人申請」を実施するすべての募集単位の選抜方法や提出すべき資料、合格者の決定方法、その他注意すべき事項などを掲載している。実際にどのような面接がおこなわれるのかとか提出資料の審査で具体的にはどんなことが評価の対象になるのかといった細かい点はわからないものの、少なくともわが国の多くの大学におけるAO入試学生募集要項に記載されているよりは具体的な説明がなされている。そのうえ、各募集単位の情報1冊の冊子としてまとめられており、それさえ入手すればすべての募集単位の状況がわかるようになっているのである。

このように台湾の「個人申請」（「申請入学」）は、同じように自己推薦型選抜だとみなすことができるとはいえ、わが国のAO入試とは大きく異なる展開をみせている。台湾では「個人申請」で入学した学生の学業成績は他の選抜方法を経て入学した学生と比べても悪くないという結果も出ていることから⁸⁾、両者の

選抜方法を比較することによって、わが国のAO入試を相対化し、よりよい改善の方向性を見つける手がかりを得ることができるように思われる。

注

- 1) 台湾の高等教育機関は大きく大学および学院と、専科学校とに分けられる。本稿で大学入学者選抜方法というときには、主として大学および学院の全日制課程に進む者を選抜するものを念頭においている。また、大学および学院の総称として大学という語を用いている。
- 2) 台湾では基本的には系（学内組織としてはわが国の大学の学科に相当）という組織を単位として学生募集がおこなわれる。しかし現在は、系のもとに組というさらに細かい単位を設定したり、逆にいくつかの系をあわせた学院というレベルで一括して学生募集したりしているので、本稿ではそれらをまとめて募集単位という語で総称している。
- 3) 指定科目試験は国語、英語、数学（数学甲、数学乙）、歴史、地理、物理、化学、生物のあわせて9科目から構成され、各募集単位がこのなかから3～6科目を選ぶことになっている。
- 4) 『台湾日報』1997年7月15日および『中国時報』1998年1月26日。
- 5) ただし実際には、試験分配入学で合格した者の比率が78.4%を占め、推薦入学および「申請入学」で合格した者の比率をあわせて17.4%にとどまった（教育部2004: 41）。
- 6) 面接試験における公正性や客観性の問題に関しては、大学の側からさまざまな措置を講じて公平性を確保しているとの意見も出されている（『中国時報』1999年4月2日）。また2002年には、教育部か

ら、こうした問題に対応するために口頭試験や技能試験などについては録音、録画もしくは詳細な文書記録を残し、それを一定期間保存するよう求める規定が出された（『中国時報』2002年4月4日）。

- 7) 第2次選考で学科能力テストの成績を用いない31の募集単位のうち、10の募集単位は技能試験のみで合格者を決定し、同じく10の募集単位は口頭試験・面接試験と提出資料の審査で合格者を決める。
- 8) 2005年8月30日に国立台湾大学を訪問したさいに同大学登録組主任の洪泰雄氏より提供された資料による。

文献

- 大学招生委員会聯合会九十三年度大学甄選入学彙辦中心, 2003, 『九十三年度大学甄選入学招生簡章彙編』, 台北。
- 岩坪秀一, 1996, 「台湾の大学入試事情」『大学入試フォーラム』19, 大学入試センター: 51-4。
- 教育部, 2004, 『中華民國教育統計 民國九十三年版』教育部, 台北。
- 李海績・鄭新蓉主編, 2003, 『台湾教育概覽』九州出版社, 北京。
- 文部科学省, 2004, 「平成16年度国公立大学入学者選抜実施状況」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100604/001.htm, 2005/05/22)。
- 行政新聞局, 1998, 『中華民國年鑑 (八十六年度)』正中書局, 台北。

付記

本論文は、平成17年度科学研究費補助金「中等教育の多様化に柔軟に対応できる高大接続のための新しい大学入試に関する実地研究」(研究代表者: 白川友紀)による研究成果の一部である。